

〈原著〉

高等学校家庭科における主体性定着への取り組み

— 生徒によるルーブリック作成への挑戦 —

三 谷 有香史 (藤女子大学大学院 人間生活学研究科 人間生活学専攻)

本稿は、セルフスタディによる筆者の実践の振り返りを通し、ルーブリック評価を活用した生徒の主体性の向上と主体性の定着について論じていく。

近年は、高等学校学習指導要領における目的も従来の知識重視型から、知識や技術を応用して物事を創造的に考え、取り組む目的に移行している。そのため、指導内容の変化に伴い、評価方法も生徒が知識や技能を活用している様子を見る必要がある。その際、ペーパーテストでは測りきれない力を測るためにはルーブリック評価を活用した方法がある。また、新学習指導要領では生徒が学びに向かう姿勢も観点別評価において列挙されている。筆者は、ルーブリックを活用し、生徒の主体性を向上させるきっかけや、生徒の主体性を定着させるにはどのようにしたらよいかについて検討し、生徒によるルーブリック作成を実践研究として実施した。

高等学校家庭科の授業におけるルーブリック評価の実践を通じて、生徒自身によるルーブリックを実践することが生徒の主体性を向上させるきっかけとなりえるのではないかと考察した。ただし、生徒の主体性を定着させるには、生徒の主体性が身につくよう、幾つかの科目が連携し授業内で繰り返し実施する必要がある。今後は、高等学校家庭科におけるルーブリックの実践と生徒の主体性の向上や主体性定着のために、生徒によるルーブリック作成等、様々な観点からルーブリックを活用し、生徒の変容をみることができるよう継続して実践していきたい。

キーワード：ルーブリック、主体性、高等学校家庭科、生徒によるルーブリック作成、学習指導要領

はじめに

本論文では高等学校家庭科の実践において、ルーブリック評価を活用し、生徒に主体性を育ませる取り組みを検討することを目的としている。この取り組みによって、第一に生徒の主体性の向上のきっかけづくり、第二に生徒の主体性のより効果的な定着への取り組みを明らかにしたい。そのためにまず、そもそも主体性とは何かを明らかにした上で、先行研究及び筆者の実践研究を進めていく。

筆者は高等学校における現職の家庭科教員であり、この2021年の3月で教員生活10年目を終える。教育評価ルーブリックの研究をする中で、生徒による主体性を向上させるきっかけづくりの一つとして、生徒自身にルーブリックを作成させる取り組みを2020年度

の後期から実践している。

筆者は、以前から、生徒に家庭科を通して主体性や実践性、創造性を持って物事に取り組んでほしいという思いをもっていた。元々は、前任校における教育課程研究指定校事業の担当者になった際、指導方法と教育評価の研究をテーマとして実施するにあたり、これらのキーワードを扱ったのが発端である。筆者は、生徒達に社会に出てから自分で考えて行動できるようになってほしいと考えていた。それは、毎回の授業や日頃の生徒との関わりから、生徒の中には自分の考えを持っているのにも関わらず、自分の気持ちや考えを出せずに過ごしている生徒がいた。加えて、教員に言われたからやっている生徒、言われなくてもやっている生徒等々である。そのような現状から、自分の意志で物事に向かい取り組むことを考え、社会に出てから

自分の意思をもって活躍してほしいと考えることが多くなっていった。そして、何よりも「自分は、本当のところできる」ということを生徒に実感してほしいという思いを教員として強く感じていた。

そこで、ルーブリックを活用することによって、教員の意図する目標を達成するためのツールとしてだけでなく、生徒の主体性を向上させることはできないかと考えた。先行研究として安藤輝次は、生徒によるルーブリック作成に関して「ルーブリックには、子どもの学習を促す機能があるのではないかと指摘している¹⁾。安藤は、ルーブリックの特徴の一つである学習の到達度を段階的に示す指標について論じ、通常は目指してほしい目標を教員が提示するが、その目標を生徒が設定することで、生徒が自ら目標に向けて具体的な取り組みを考察する機会になり、生徒の主体性の向上に繋がるとしている。

以上のようなことから、本論文では、筆者自身の教育実践に関わるセルフスタディや学習指導要領などのテキスト分析を活用して研究を進める。そもそも、ルーブリック評価や主体性はなぜ必要となっているのだろうか。本論文では、高等学校家庭科における生徒によるルーブリック作成の取り組みを通じて、生徒の主体性の向上や定着のための授業づくりについて、授業分析との往還の視点から論考したい。

1. 筆者によるルーブリックの実践の考え方

1) ルーブリックと指導方法の関係性

ルーブリックとは、様々な観点で生徒を評価することができ、○・×ではなく、到達目標が段階的に記述的に示されている。よって、ペーパーテストでは測りきれない生徒の活動を測ることができる。評価の段階は、SABCなどの4段階に設定されることが多い。多様な評価方法がある中で、なぜルーブリックが必要とされてきているのだろうか。

現在は、特に高等学校では新旧学習指導要領の移行期であり、生徒に身に付けさせたい目標が変化してきている。その目標とは、知識を応用して様々な物事に対応する力が必要とされている²⁾。このことから、暗記や詰込み型の指導方法ではなく、生徒が活動している場面に授業内で設定し、生徒の多様な活動の結果だけでなく、そのプロセスを評価していく必要がある。よって、講義形式のみでの生徒の暗記力や知識量を測るだけの評価では対応しきれない。そこで、ルーブリックによって、多面的であり且つ段階的に生徒を評価することが必要になってきている。指導と評価の一体化は言うまでもないが、目標に則した授業内容の工

夫や評価方法の工夫は一つの帯のように連なっている。それでは、筆者はどのように、授業においてルーブリックを活用しているのだろうか。

筆者の実践では、授業の中で生徒が活動する時間を設定している。それは、ルーブリックを活用するためではなく、あくまでも、生徒に身に付けさせたい力を達成するためである。ルーブリックは、授業の導入時に配布する。そして、授業の最後に生徒による自己評価、教員による評価とコメントを記入し、生徒にフィードバックしている。筆者の担当科目では、ルーブリック評価を活用し、毎回の授業の生徒の様子も評価をしている。加えて、知識理解に重きを置いている座学が中心の科目では、知識を応用した思考判断表現に該当する内容もペーパーテストに取り入れるようにしている。技能に重きを置いている実技系科目では中長期的な作品制作におけるルーブリックの評価基準を設定するという特色を考慮しながら、ルーブリックを実践している。

そこで、筆者がルーブリックを活用し、生徒の主体性を向上させられないかと考えるようになった背景をみていく。

2) 主体性とその定着とは

教育活動における主体性とは何か、また主体性の定着にはどのようなことを必要とするのか。まず、「主体性」の定義である。藤井千春によると「『主体的』な学びであることは、子どもが自分の言葉で自分の考えや気持ちを語っていること」とされている³⁾。他者の言葉ではなく、自分の言葉で話すことで主体的な学びとされている。自分自身の言葉で自分の考えなどを表現することが主体的な学びだとしているのである。つまり表現力と主体性をほぼ同義と捉えている。

また、吉川雅也によると「①自己が考えること、②自己が行動すること」と主体性を定義している⁴⁾。つまり、自分で考え、自分で行動することである。さらに、中間玲子は主体性について、「環境と対峙する個の存在を前提とした概念である性質があるため自尊心との関連が強いが、近年疑問視する動きがあり、多面的に検討する」としている⁵⁾。この視点から主体性を様々な方向から検討している。

これらをふまえ、本論での主体性とは、「自らの意思で目標に向けて取り組む姿勢や態度が何等かの場面で見られることや、学ぶための様々な姿勢」と定義する。

次に、主体性の定着について学習指導要領をもとに考察したい。新学習指導要領によると、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進める際には、「授業の方法や授業の改善のみを意図するのでは

なく、生徒に目指す資質・能力を育むために『主体的な学び』、『対話的な学び』、『深い学び』の視点で、授業改善を進める」とされている⁶⁾。単純に、知識や技能を得ることを主眼とした授業改善ではなく、生徒自ら学び、生徒同士の会話や深い学びを実現することを示している。このことから、生徒が知識や技能を得ることを目的とするだけでなく、その過程で自ら学ぶ姿勢を持つことも目標の中に含まれている。

さらに、「基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には、それを身に付けさせるために、生徒の学びを深めたり主体性を引き出したりといった工夫を重ねながら、確実な習得を図ることを重視する」とされている⁷⁾。このように、授業改善の観点として、授業の進め方のみならず、生徒が知識や技能を得るまでの過程に、確実に学ぶ姿勢や、自ら学んでいく姿勢を修得できるように工夫する必要がある。つまり、主体性とは「授業を受けている生徒の様子や生徒がその学びにどのように関心を持って学んでいるか」である。

そこで、目標を達成した生徒は、どのように評価されていくのだろうか。その観点別評価についてみていく。

前述したとおり、現在は新旧学習指導要領の移行期である。学習指導要領の目標が変更されたことに伴い、観点別評価も4観点から3観点到移行している。新旧の観点をそれぞれ見てみると4観点では、「関心意欲態度・思考判断表現・技能・知識理解」である。一方、3観点では「学びに向かう人間性・思考判断表現・知識技能」である⁸⁾。

それぞれの評価の観点は、関心意欲態度は、授業中の生徒の様子や授業へ向けてどのように準備しているかということである。思考判断表現は、学びの中で自分の思いを考え判断し表現することである。技能は、生徒の活動における作品制作や調理技術の分野である。知識理解は、家庭科における様々な知識についてである。

一方、3観点では学びに向かう人間性は、関心意欲態度の分野が該当する。ただし、人間性とは、生徒の性格ではなく、あくまでも生徒の授業への向かう姿勢についてである。思考判断表現では、4観点の思考判断表現の要素に加えて、学んだことを応用して表現する視点をも含んでいる。知識技能では、知り得た知識や基礎的な技法についてである⁹⁾。

よって、観点別評価における主体性とは、4観点では関心意欲態度で評価し、3観点では学びに向かう人間性の観点で評価する。生徒の授業中の様子やその前後の取り組みの様子の中で、どれだけ自分から行動で

きているのか、という視点で主体性としたい。しかし、生徒によっては、主体性があるように見えても、実際にはそのようなことはないということもあり、その実態を把握することが難しい。さらに、主体性の定着となれば、例えば、授業前に実習の準備をいち早くできていれば主体性があり、時間通りにきた生徒は主体性がないのかといえそうとは言い切れない。今一度、筆者の目指す主体性と客観的な視点での主体性及びその定着について考察する必要がある。

関心意欲態度及び学びに向かう人間性を測定する評価方法は、様々な方法がある。筆者は、前述の通り主に、ルーブリックを活用し、生徒によるルーブリック作成を実施した。

次に、ルーブリックの実践及び、その具体的な内容についてみていく。

3) 筆者の実践の課題

筆者は、これまでの教育実践を振り返り、次の三点を課題として考察した。

第一に、家庭科におけるルーブリックの必要性への再考である。ルーブリック活用にあたり、単純に教育評価のためのツールとして活用するのみならず、それを実践する理由や目的は何かを常に意識するようになった。筆者は、前述の通り、以前からルーブリックを活用していたが、実施が目的であった。しかし、指導目標があつてこそその授業内容、授業内容があつてこそその教育評価である。生徒にどのような力を身に付けさせたいのかの教育目標を改めて考察し、ルーブリックの実践が目的ではなく、何が物事の根本にあるのかを考える必要がある。筆者は、生徒が自分で考え、自分で行動できる人になってほしいという思いから、ルーブリックを活用したいと改めて考えるようになった。

第二に、生徒の主体性には、生徒に何を身に付けさせたいのかについて再考した。生徒が自ら考え、自分で責任を持って物事に向かう際、自ら考え行動できる人になってほしい。そこで生徒に主体性をつけさせるため、生徒にルーブリックを作成させることを実践に取り入れることにした。

第三に、高等学校家庭科の授業におけるルーブリックの活用とともに主体性を向上させるとはどのようなことを意味するのか、その困難性やそれを乗り越える方法を考察した。実践では、筆者の担当科目5科目全てでルーブリックを活用している。その中で、毎回の授業において、生徒は、各自で目標を持って授業を受けるようになった。筆者の授業においては、授業者も教科の目標とともに、自身の説明の方法や生徒に伝え

すぎずに、考える方法を伝えるように心掛けた。

以上のような課題をもとに、高等学校家庭科におけるルーブリックの実践内容と主体性の関連性について次のような授業を展開した。

4) 高等学校家庭科におけるルーブリック実践内容

本実践研究は、筆者が勤務する高等学校の管理職や、生徒の同意を得て実践している。

家庭科における目標は、それらの各目標を達成する過程で、生徒が自ら行動し、実践し、考えることを通して、家庭科の様々な学びを深めていけることと学習指導要領に記載されている¹⁰⁾。例えば、衣食住の観点から、生徒が毎時間の学びで、知識理解を通して、その学びをどのように実社会で活かしていけるのかをルーブリックを活用して、様々なパフォーマンス課題にて網羅しているところである。

その学びの中で、様々な実社会での課題解決のために主体性を持って解決への道筋を立て、他者との協働的な取り組みから答えを導き出すこともある。物事を課題解決のためにあらゆる視点から想像し、実生活でどのように実践するか考察していくことができる。このようなことから、主体性・実践性・創造性は、家庭科の学びの過程に常に存在しており、それぞれの要素を合わせて、学びを深めていくことができる。

今回の題材として取り上げた「生活教養」は、学校設定科目である。主な授業の内容は、教養やマナーを学ぶことである。家庭科の総合的な知識を元に、社会人・国際人としてのマナー等多岐にわたっている。同科目は3年次生対象ということで、卒業後の進路を直に考察しやすい年次であった。

「生活教養」の学びでは、主体性として、自分がその場にいたとき、どうしていけるか当事者意識をもってほしいことから、生徒に自ら動けるようになってほしいと課題の提示の仕方を何かの役職に見立て、ワークシートの課題に取り組みさせた。知識理解の伝達のみならず、その知識をどのように活用するか、考え、自分の考えを文章や作品等様々な方法で表現をさせる場面を設定した。指導内容が、より実社会とつながるように意識した。実践性では、生徒の一步先を見越して、基礎から発展を考えられるように課題設定をしていった。創造性では、実践する前の段階とその後どうなるか相手はどのように感じるかを念頭に生徒が意識できるように、問題設定を意識して行った。このようなことから、「生活教養」における主体性・実践性・創造性は、それぞれの学びの中で課題を解決していくための手段として欠かせない要素である。

生徒によるルーブリック作成における課題は、次の

二点である。一点目は、ルーブリックに慣れてきた生徒の目標を達成する意識がルーティンワークになっていないかということである。二点目は、生徒は、与えられた目的を理解して、取り組んでいるのかということである。教員から提示された課題は「こなせる」が、自分で取り組むことを組み立てにくい生徒がいる現状や、目的を理解できずに、何気なくいい点数を取りたい、又は、特に、目標は持たずに何となくやり過ごす生徒がいる現状があった。

この二点に留意しつつ、与えられたものを目指すだけでなく、自分の考えで、目標までの道筋をたてるように主体性を育ませることを目的として、生徒にルーブリックを作成させる取り組みを実施した。具体的な内容をみていく。

2. 生徒が作成するルーブリックへの挑戦

1) 生徒によるルーブリックの作成

生徒によるルーブリック作成の取り組みは「生活教養」の授業の中で実施した。この分野は、作品の紹介におけるスキル編と、作品の完成度合いを示す思考判断表現を問う課題である。具体的な取り組みの流れをまとめた「生徒によるルーブリック作成の流れ(表1)」の通り、段階を経て実施した。

第一段階の授業は、毎回のルーブリックの欄外に「この評価基準での“SS評価”(通常のSABC評価で想定するランキング基準を超えた一番高い評価よりも上)の評価基準を作成して下さい」という課題を提示した。筆者や教員の評価における最高ランクはS(教員が想定する基準を大幅に超えた評価)である。しかし、生徒の自由な発想を止めず、教員が設定するS評価よりも上という条件でどれだけ考察できるか、自分ならこう考えるという視点で主体性を持って取り組んでほしいという意図から設定した。

授業の最後に実施しているルーブリックに基づく自己評価を記入する時間に、“SS評価”を作成させた。筆者の予想よりも生徒は記載できている様子が見られた。筆者が作成したSABCの評価基準を参考している生徒もいれば、S評価とのつながりをあまり意識せずに自由に作成している生徒もおり、教員が意図する授業目標とのつながりを意識として持たせる必要性を感じた。そのため、作成時における注意事項として「S評価との関連性を持たせる」ことを次の授業で補足説明した。

第二段階の授業は、SABCの評価基準表を提示せず、

表1 生徒によるルーブリック作成の流れ

<p>目的：与えられたものを目指すだけでなく、自分の考えで、目標までの道筋をたてるように主体性を育ませるため。</p> <p>第一段階</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 通常のルーブリックにSS評価を生徒に記入させる。 (2) 教員でチェックする。 (3) 生徒に返却。 ※(1)~(3)の工程を2回実施した。 (4) 目標を提示。 (5) 目標に基づくS評価を考察させる。 (6) 生徒が考察したルーブリックの要素を入れて、全体のルーブリックを教員が提示。 <p>第二段階</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 教員から、大枠のルーブリックを提示する。 ※あくまでも、例として生徒に紹介する。 (2) 生徒にS・A・B・Cそれぞれの評価基準を考察させ、全て記入させる。 (3) 課題に対して、自己評価させる。 (4) 教員は、生徒のルーブリックの内容を入れて、全体のルーブリックを作成する。 教員は、全体のルーブリックを使用し、評価する。 (5) 全体へのフィードバック ※丁寧に、どのような内容が出ていたのか、全体に共有する。 <p>第三段階</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 教員から、本時の目標を提示する。 (2) 生徒にS・A・B・Cそれぞれの評価基準に当てはまる自身の状況を考察させ、全て記入させる。 (3) 課題に対して、自己評価させる。 (4) 教員は、生徒のルーブリックの内容を入れて、全体のルーブリックを作成する。 教員は、全体のルーブリックを使用し、評価する。 (5) 全体へのフィードバックを実施する。 ※生徒の記入したルーブリックの具体的な内容を紹介し、自己肯定感を高めさせる。
--

目標のみ提示し、生徒にS評価（教員が想定する基準を大幅に越えた評価）を観点別に二つ作成させた。授業内容は、年行事のマナーにおけるクリスマスリース制作である。クリスマスリースの由来を知識理解で紹介し、完成した作品をどのようにプレゼンするかという発表の場面と、作品その物の完成度合いを評価基準として作成させた。説明の導入に、この場面での共通の目標をそれぞれの観点で生徒にワークシートに提示し、口頭でも説明をした。

目標は、①クリスマスリースの由来を理解した上で、自分のテーマに沿ったリースを表現することができる、②(プレゼンテーションで)自分の考えを相手に伝えることができる、という二本立てにし、それぞれのS評価を作成させた。一度にSABCの評価基準を作成せずに、段階的にルーブリックの作成を実施した意図は、自分の評価基準を具体的に立案することに慣れてもらうためであった。生徒は、筆者が意図する観点とは異なる評価基準を作成することも想定し、その都度、観点の意味する内容を具体例として口頭で説明をしながらルーブリックを作成させた。実際に生徒が記入したルーブリックの一部が「表2. 生徒作成ルーブリック例(二回目)」である。

当初は、例題なしに一からルーブリックを考えることを難しく感じ、S評価を考察するだけで苦戦する様

子が見られた。生徒の状況に合わせて、口頭で説明をしたり黒板に板書しヒントを出すようにした。提出内容を見ると、筆者が予想するよりも生徒は的確なルーブリックを作成することができると考えた。一方で課題としては、観点別でどこの評価の観点なのかを生徒にわかるよう丁寧に説明をする必要があった。また、今後一からルーブリックを生徒に作成させるならば、似たような観点でのルーブリック作成は、別の時間に実施した方が複数の観点が混ざって考察することなく生徒にとって理解しやすいと考える。

第三段階は、SABC全ての段階に当てはまる自身の状況を考察させ、全てを記入する生徒によるルーブリックの作成である(表3)。授業の内容は、冬期課題として出した、デコレーションパンケーキのシナリオ編である。自分で考察したデコレーションの意図を相手にどのように伝えるかがシナリオの内容である。すぐに記入できる生徒もいれば、記入に時間がかかる生徒など、様々であった。授業におけるルーブリックの評価基準と合致する課題を生徒に与えて、自分で作成したルーブリックにて自己評価までさせた。自己評価したルーブリックを回収し、教員は、生徒が作成したルーブリックをもとに全体のルーブリックを作成した。返却時には、全体説明の場で、氏名は出さずに具

表2 生徒作成ルーブリック例（第二段階：S 評価を観点別に二つ作成）

<p>目標：①クリスマスリースの由来を理解した上で、自分のテーマに沿ったリースを表現することができる。</p> <p>S（教員が想定する基準を超えた一番高い評価）生徒 A →クリスマスリースの由来を正しく説明し、自分のテーマを相手が見てわかるようなリースを作ることができる。</p> <p>S（教員が想定する基準を超えた一番高い評価）生徒 B →魔除けの役割もあり、明るくしあわせになれるような作品になっている。</p> <p>目標：②自分の考えを相手に伝えることができる。</p> <p>S（教員が想定する基準を超えた一番高い評価）生徒 A →テーマの理由や作るうえで工夫した点を相手がわかりやすいように説明できる。</p> <p>S（教員が想定する基準を超えた一番高い評価）生徒 B →相手に自分の作品をしっかりと説明でき、同じように明るくしあわせになってもらえるようなプレゼンをする。</p>

表3 生徒作成ルーブリック例（第三段階：SABC 全ての段階を記入）

<p>思考判断表現【シナリオ編】生徒 C</p> <p>S（教員が想定する基準を超えた一番高い評価） →デコレーションの工夫をわかりやすく伝え、相手の興味関心を引き立てることができる。</p> <p>A（教員が到達してほしい基準に十分到達している評価） →デコレーションの工夫をわかりやすく伝え、相手に伝わりやすい大きさと話することができる。</p> <p>B（教員が到達してほしい基準に課題があるが到達している評価） →デコレーションの工夫をわかりやすく説明できる。</p> <p>C（教員が到達してほしい基準に到達していない評価） →デコレーションの工夫を説明できない。</p> <p>思考判断表現【シナリオ編】生徒 D</p> <p>S（教員が想定する基準を超えた一番高い評価） →一人でも多くの興味関心をひくことができ美味しく感じるようなシナリオ。</p> <p>A（教員が到達してほしい基準に十分到達している評価） →誰が聞いても美味しく感じるようなシナリオ。内容も伝わっている。</p> <p>B（教員が到達してほしい基準に課題があるが到達している評価） →だいたい話が伝わる。</p> <p>C（教員が到達してほしい基準に到達していない評価） →話が伝わりにくい。</p>

体例を紹介し生徒の自己肯定感を高めさせた。さらに目標を具体的に記入できるようヒントを出し、三回目を実施した。結果は、生徒によって個性はあるものの、柔軟で、アイデアも豊富な評価基準を記載している様子がみられた。

2) ルーブリック作成の具体例と生徒の感想

生徒たちは、筆者の予想よりも詳細なルーブリックを作成することができた。全体として、発表スキルのルーブリック指標の方が、生徒は記入しやすかったようである。発表のシナリオのルーブリック作成では、発表のスキルと混在している生徒が多く、事前に違いが明確にわかる説明をしておくことが課題となった。実際にルーブリックの作成直後に、生徒にアンケートを実施した。

その結果、生徒はルーブリックの作成に難しさを感じているようであった（表4）。生徒のコメントからも特に考えることが難しいと思っているようで、生徒との会話からは、「何を書けばいいかわからない」、

「先生のヒントがあるとわかる」、「ヒントはなくてもかけるが、間違っていないという保証がまだなくて間違いたくないから書きにくい」という言葉が聞かれた。よって、「生徒自身に自分の考えが間違っていない」という自己肯定感を与えたり、間違っている際には、声のかけ方を工夫してワークシートへの記入等、素早いフィードバックと合わせて生徒へ投げかけが必要であるとわかった。

続いて、学期毎に実施している授業アンケートの結果である（表5）。

学期毎の授業アンケートでは、設問 16 の評価のように「難しい」と感じているようである。生徒のコメントを見ても、考えることが難しいというコメントや、S が一番難しい、どのように考えていくのかの手順がわからないと考えている生徒もいた。他の項目では、設問 15 によると、自ら行動しようと思ったかについては、①とても考えるようになったが 3 名、②考えるようになったが 8 名となっている。設問 17 では、①とても考えるようになったが 2 名、②考えるように

表4 ルーブリック作成に関するアンケート結果（「生活教養」履修者19名）

○ルーブリックを作成してみたの感想 ①難しかった：15名 ②普通だった：2名 ③簡単だった：0名 未回答：2名
○ルーブリックを作成してみたの感想（記述編） ・自分で最初から考えるのが難しい。 ・考えることが難しい。 ・難しい。（複数回答） ・慣れてきた。 ・Sが一番難しい。

表5 授業アンケート結果：設問12～17（「生活教養」履修者19名中回答者14名）

12 毎時間のルーブリックの目標達成へ向けてあなたは積極的に授業に取り組みましたか？ ①とても積極的に取り組んだ：7名 ②積極的に取り組んだ：6名 ③あまり積極的ではなかった：0名 ④全然積極的ではなかった：1名
13 毎時間のルーブリックの目標達成へ向けて、授業中、自分なりに工夫をしましたか？ ①とても工夫した：4名 ②工夫した：8名 ③あまり工夫しなかった：2名 ④全然工夫しなかった：0名 未回答：1名
14 毎時間のルーブリックを通して、あなたは、自分の課題を見つけ、解決策を見つけようと努力しましたか？ ①とても努力した：3名 ②努力した：6名 ③あまり努力しなかった：5名 ④全然努力しなかった：0名
15 毎時間のルーブリックを通して、教員に言われずとも、自らの行動を起こしたり、何かしようと思えるようになりましたか？ ①とても考えるようになった：3名 ②考えるようになった：8名 ③あまり考えていない：2名 ④全然考えていない：1名
16 ルーブリックの作成は、どのように感じましたか？ ①とても難しかった：4名 ②難しかった：9名 ③簡単だった：0名 ④とても簡単だった：0名 未回答：1名
17 ルーブリック作成を通して、授業や日常生活で自分から目標を見つけようと考えましたか？ ①とても考えるようになった：2名 ②考えるようになった：7名 ③あまり考えていない：4名 ④全然考えていない：0名 未回答：1名

なったが7名である。一方、③、④の回答をしている生徒では、記述式では、なんとなくそう感じる、自分はできていなかったという回答から、自分に自信がない生徒もいる。以上のような状況から、毎回のルーブリックの取り組みで、生徒自身が達成できた点を明確に示す、授業内での課題を整理して伝えるようにフィードバックや生徒とのコミュニケーションを大切にしていくなどの改善点が明確になった。

今回の生徒によるルーブリックの作成によって、生徒の主体性や実践性、創造性に、多少なりとも影響を与えることができたと考えている。自分で目標を考察し、なにを目指せばよいかを段階的に考察することで、自分ならこうしたい、又は他者が要求するこうしてほしいという思いをルーブリック作成にあたり気が付いている生徒の様子をみることもできた。また、思っていることを形にすることで、自分の考えを整理するこ

とに繋がった。さらに、一つの目標のみならず、段階的に作成することで一番高い目標にいくまでに、何をしたらいいのかを逆算して考察する必要性に気付く生徒もいた。「自分はいつもCな気がするけど、あの人はSくらいじゃない？」というような実際に起きていることを想定している生徒もいた。実践したことのないものに対する目標設定は、創造しながらの作業ということで、生徒にとっては、大変な作業だったはずである。これまでの経験や授業の内容を活用し、考察することで、創造性につながったのではと考えている。また、自分で設定した目標に向けて実践したものを自己評価することで実践性を図ることに繋がった。全体を通して、自ら実践する主体性を育むきっかけとなったのではと考えている。

授業アンケート全体を見ると全員の生徒が、①とても積極的に取り組んだ、または②積極的に取り組んだ、

に該当していた訳ではない。しかし、自分はあまりできていないという自己理解に繋がり、「今後は少しはやるかな」、「そもそもやり方がわからない」、「考えたこともなかった」という回答を得られたことが、生徒にとっては、主体性や実践性、創造性へのきっかけづくりになっている。今後は数値だけではなく、生徒の活動の様子から主体性や創造性実践性がついたとわかるよう生徒の変容をみられるきっかけづくりを継続したい。

回数を重ねて、自分たちで難なく目標から具体的な評価基準を作成することに慣れていけば、ルーブリック作成の観点から主体的に、自分の取り組むことを具体的にしていく力をつけていくことができると考える。また、今回の取り組みは、3年次生の後期導入からスタートし、ルーブリックに慣れてきてからの実践であったため、何もルーブリックを知らないで実践するよりは、生徒は慣れている可能性はある。それでは、今回の取り組みについて、生徒によるルーブリックの作成の課題や今後必要になる方策とはどのようなことがあげられるのだろうか。

3. 生徒によるルーブリック作成を実践しての課題と今後への展望

この取り組みは、筆者の担当する「生活教養」以外の4科目でもSS評価の作成までは実践した。二年次生の科目でも実践したが、何を目的に実践するのかという視点と、ルーブリックの中でもスキルのみならず、考察して記入する知識を問う内容のルーブリック両方をバランスよく実践しているという点から、「生活教養」の授業を、考察対象としてきた。今回の取り組みから、次のようなことが明らかとなった。

一点目は、生徒は、筆者の想定以上に、自分で段階的に評価基準を立てることができた。さらに、普段発言を多くしない生徒も、自分の考えを具体的かつ段階的に記入する力を持っていることがわかった。生徒によるルーブリックの作成の前は、筆者の想定としては、ほとんど書けない状態の生徒が半数以上出てくると予想していた。実際に取り組んだ結果では、生徒はそれぞれに目的に応じた段階的な評価基準を考え、記入することができていた。

二点目は、生徒自身によるルーブリックの作成は、生徒が自分でできることを発見し、実際に取り組むことができるきっかけとなったことである。自分自身で、目標達成のための評価基準を段階的に考察することによって、達成したい目標は全員共通であっても、段階的な評価基準の考察は、生徒によって少しずつ変

化がみられ、個々の考えていることを可視化させる。生徒それぞれが何を目指し、どのように行動するのが具体的にすることが可能である。

主体性の定着のためには、このような取り組みを継続して実施しなければならない。ルーブリック作成がゴールではなく、さらに先には生徒自身に主体性、つまり家庭科の授業を通じての新たな発見や学びたいことや、やってみたいことを考えるという姿勢を定着させる取り組みも試行したい。そして生徒の自己肯定感を更に高めながら、授業の取り組みを通してルーブリック作成後の変容が見られるよう様々な観点で実践していきたい。

そのような中長期的な取り組みを、毎回の実践を精査し、次回にすぐに取り入れて実施していくことが必要である。高等学校家庭科における生徒の主体性の定着には、まだ本研究のみでは具体的な方法を明らかにしきれていない。今後の取り組みの過程で、多様な授業内容とルーブリック評価を活用し、生徒の主体性の定着を進めていきたい。とはいえ、生徒によっては、意図していることと表現していることが異なることがありえる。そのようなことも踏まえ、主体性とは何か、今一度再考し、生徒に見合った主体性を理解し、筆者の目指す目標に引き上げる方法を考え、実践していく必要がある。

おわりに

本論では、ルーブリックを活用しての生徒の主体性の向上及びその定着のためにはどのようなことが必要なのかを考察した。そもそも、主体性とはどのようなことを示すのか、客観的な視点での主体性とは何かという点についてさらに考察する必要があった。今回の研究をとおして、教員としての自らの気づきがあった。

重要なことは、ルーブリックを活用する目的や方法、内容、評価などの全体像を俯瞰的に見て進めていくことである。主体性やルーブリックの関係性などキーワードが構築される背景や、なぜその分野が必要になったのかを一つの観点だけではなく、別の視点からも考察する。そのことによって、その事象が抱えているメリットもデメリットも把握していくことができると実感した。それによってあらゆる事態に想定した理解と説明が可能になり、想定していく視点も広がる。主体性を定着させるには、主体性とは何かを幅の広い視点で理解した上で定着させる取り組みを継続して、実施する必要性を実感した。

本論では、ルーブリック評価及び生徒の主体性という視点で研究を進め、主体性の向上や、生徒の変容に

ついて焦点をおいて生徒にルーブリックを作成させた。主体性の定着にいたるには、継続した取り組みが必要である。継続して何をするのか、本稿で論じた方法以外にも生徒の主体性の定着のためにルーブリックを活用した取り組みを実施したい。

今後は、生徒のルーブリック活用による主体性の定着や高等学校家庭科におけるルーブリック評価と生徒の変容の関連性について研究を進めていきたい。

引用・参考文献

- 1) 安藤輝次「ルーブリックの学習促進機能」『関西大学文学論集(第64号)』, 1頁, 2014年
- 2) 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 家庭編』文部科学省, 3頁, 2018年
- 3) 藤井千春『問題解決学習で育む『資質・能力』—誠実な対話力, 確かな情動力, 互恵的つながり力—』明治図書, 30頁, 2020年
- 4) 吉川雅也『キャリア理論における主体性』『関西学院商学研究』(第70巻), 28頁, 2015年
- 5) 中間玲子『自尊感情と心理的健康との関連再考—「恩恵享受的自己感」の概念提起—』『日本教育心理学会, 教育心理学研究』(第61巻 第4号), 376頁, 2013年
- 6) 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 家庭編』文部科学省, 4頁, 2018年
- 7) 上掲6), 4頁
- 8) 田中博之『「主体的・対話的で深い学び」学習評価の手引き—学ぶ意欲がぐんぐん伸びる評価の仕掛け』教育開発研究所, 18頁, 2020年
- 9) 上掲8), 18頁
- 10) 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 家庭編』文部科学省, 12頁, 2018年

Efforts to build and sustain students' independence in learning high school home economics

— Starting to make a rubric by students —

Yukari MITANI

(Graduate department of Fuji Women's University Department of Human Life Science
Specializing in Human Life Studies)